

2 最近のイチジク品種の動向

現在、県内で出荷されているイチジク品種は、ほとんどが8月～10月（露地）収穫の「榊井ドーフィン」で、全国的にも70%以上を占めている。他県では福岡、広島県などに「蓬萊柿」があるが、経済栽培されているのはこの2品種だけといってよい。

両品種とも大果多収であるが、食味は最上とはいえない。イチジクには、海外各地から導入された品種が約50品種程あり、その中には食味の点で両品種より優れるものも数多くあるが、ほとんど普及していない。果実が小さく収量が上がらないことと、どの品種ともほとんど収穫時期が同じで、異品種導入による労力分散ができないことが主な理由である。

しかし、これらの品種の中でも食味が良く、独特の外観を持つこと等を売り物に、直売や差別化商品として伸びる可能性のある品種もある。特に、夏果専用種「ザ・キング」は、結果習性他品種と異な

り収穫時期が露地で7月と早く、労力分散が可能である。果実は「榊井ドーフィン」より小さいが、糖度が高く、食味は良い。果皮は赤く着色しないが、美しい黄緑色である（表紙写真）。また、梅雨期に成熟する割に裂果、腐敗果がなく、日持ちが良い等の特色を持つ。栽培法については平成13年1月号で紹介したが、従来の一文字整枝法をベースにした簡単な整枝法で、「榊井ドーフィン」の約 $\frac{1}{2}$ の収量を上げることができる。

この他、秋果品種には一口サイズで糖度の高い「セレスト」、酸味もあって味が濃厚な「ブルジャソットグリース」等もある。イチジクの新品種の導入には、加工品や様々な用途の開発を含めて新しい販売戦略をあわせて検討する必要がある。

真野 隆司（農業技セ・園芸部）